

## 二つの正月

—植民地台湾における時間の重層と交錯（1895-1930年）—

顔 杏如

はじめに

第1節 在台日本人の正月

第2節 本島人の正月

第3節 時間の交錯

結び

（要約）

本稿は歳時の一つである正月を手がかりとし、いままで見落とされてきた在台日本人の視角をとりいれ、同じ植民地空間におかれる日本人と台湾人の生活リズム、異なる生活リズムが織り成した植民地の風景、そしてそこで生まれた文化の変容を考察した。その結果、在台日本人が新正月を過ごすという一般的なイメージをくつがえし、台湾領有初期には旧正月を祝う日本人がおり、異なる生活リズムが日本人同士の間にも存在することを見出した。1909年太陰曆併記廃止後、在台日本人の間では新正月を迎えるのが定着したが、台湾人との接触により様々な形で旧正月を体験し、もう一つの時間リズムに巻き込まれざるを得なかったといえる。一方、異質な文化と共振した結果、台湾人の正月の風景も変容しはじめ、時間と文化の混淆がその中に見られる。1910年代後半から新正月の風景が大きく変えられたところ、二つの正月を迎える現象も普遍化した。更には、人々が国家の時間と対面するありさま、そこで出現した時間の重層についても考察を行った。

はじめに

1895年日本の台湾領有を契機として、国家の統治及び資本の活動が台湾において進展するにつれて日本人の台湾移住が進んだ。人々の移動により、異質な文化、習慣、風俗は植民地台湾という空間で出会い共振しつつ、自身でも、他者に対しても、文化の変容を起こさせ、多元的で複雑な植民地社会の生活様相を生み出した。しかし、いままでの研究は文化、習慣を含む生活諸相について、台湾人の部分にしか関心を持ってこなかった<sup>1</sup>。在台日本人が外地でどのように過ごしていたのか、そして、異なる文化、考え方、意識を持つ異なる民族が同じ空間においてどのような生活の風景を織り成したのかについては従来の植民地台湾研究では見落とされてきた<sup>2</sup>。これらの問題を究明することにより、植民地社会、そしてその時空に生きていた人々の生活像にいつそう接近できると考えられる。

異質な文化が共振しつつ作り出した植民地社会の風景と当時代の雰囲気を考察するにあたって、筆者は歳時の一つである正月を手がかりとする<sup>3</sup>。歳時は社会の運行のリズムと深くかかわるものであり、人々の伝統、習慣、時間の捉え方をも背負うものでもある。植民地統治下に、新しい制度の導入、異なる文化を有する人々が同じ空間におかれること、などの幾つかの要素が加わり混ざりあうことで、時間は複雑な相貌で現れた。たとえば、1928年台北市役所が編纂した『台北市案内』には興味深い表が掲げられていた。「年中行事」をタイトルとする表で、一月から十二月まで「国家的行事」、「社会的行事」、「家庭的行事」、「本島人特有行事」という四欄を分けて一年間の行事を羅列しており、このうち、「本島人特有行事」の欄はすべて「旧曆」によって記して

いた<sup>4</sup>。この表は植民地下台湾都市社会の何をわれわれに語っているのだろうか。

さかのぼって、1895年12月27日日本政府は勅令167号を以って以下のようにこの新領土の標準時を定めた<sup>5</sup>。

第一条 帝国従来ノ標準時ハ自今之ヲ中央標準時ト称ス。

第二条 東経百二十度ノ子午線ノ時ヲ以テ台湾及澎湖列島並ニ八重山及宮古列島ノ標準時ト定メ、之ヲ西部標準時ト称ス。

第三条 本令ハ明治二十九年一月一日ヨリ実行ス。

このような新たな時間標準のほか、政府の推進、学校教育、交通や産業活動により、「週」の観念、タイムスケジュールに沿った物事の進行、機械が刻む標準化した時間などが徐々に植民地下におかれる人々の生活に行渡っていた<sup>6</sup>。標準時が立てられ、標準化した時間が浸透しつつあった一方、もう一つの次元における「時間」、すなわち一年間のサイクルを刻む年中行事、祝祭日は、前述した表が語っているように、幾重にも重なり、計測される時計の時間と同じように一年の時間を刻み、人々の生活ペースを規定し、生活の秩序をも形作っていた。

正月は一年の始まりという重要な位置を据え、新正月を過ごすのかあるいは旧正月を過ごすかというのは「文明化」の指標である一方、人々の時間の捉え方をも反映していた。本稿はそのような年中行事の一つである正月に着目し、同じ植民地空間に置かれる日本人と台湾人がそれぞれどのような時間リズムで生活を過ごし、そして、それらの異なる時間のリズム、時間を刻む行事、行事に伴う文化などが植民地という一つの空間に圧縮された結果、どのような文化現象を生じてくるのかを検討する。一方、生活のリズムがすれ違うなかで台湾人と日本人の生活の接点はどこにあるのか、日本人によって持ち込まれた文化はどのように台湾人の生活に影響を及ぼしたのかなど、日本人社会と台湾人社会とのインターフェイスとインターアクションに着目し、植民地政府が推進しようとする時間の制度はどのように人々の生活を左右するのかにも目をつけ、植民地における様々な時空の交錯の様態を探求してみたい。

## 第1節 在台日本人の正月

### 1. 在台日本人も旧正月

植民地台湾において、皇民化政策が徹底するまでには、日本人は新暦の正月を、台湾人は旧暦の正月を過ごす、というのが一般的なイメージであった。台湾人も新暦の正月を過ごすべしとの指摘が台湾領有初期から見られるが、その当時日本人自身さえ必ずしも新正月を過ごしていたというわけでもない。

台湾領有後二年目の正月、『台湾新報』で以下のような新暦の正月の風景が描かれている。

見渡せしところにては門松並び福い竹門なみに立ちたる有様本国の光景につゆ違はぬと  
黒塗り紋付の腕車走らず高帽鮮衣の文官少なく・・・年賀廻禮者の客免も角足数少なくて場

況そぞろに寂し追羽子の音聞へず紙鳶の聲風にひびかず歌かるたの催しも見ず少男少女の戯れ合ふさまも無く・・・<sup>7</sup>

この描写から、領台初期の新暦の正月は門松だけ飾られており、そのほかは全く正月の風景を見られず、正月の雰囲気も感じられないことが明らかである。それでは、なぜこのような寂しい風景であったのか——幾つかの原因が考えられる。まず、「追羽子の音聞えず紙鳶の聲風にひびかず」という点は、領台初期「内地人」の社会構造と深くかかわると考えられる。1897年の台北を例とすると、駐在の軍隊を除く「内地人」の数は2575人で、その中、女性は620人しかいなかった<sup>8</sup>。時間が少し下る1905年、はじめての国勢調査の「人口ノ年齢構成」図を見れば、女性人口が少なく男女比率が不均衡である一方、十五歳以下の人口が極めて少ないことが分かる<sup>9</sup>。羽根つき、凧は子供や女の子の遊びであるが、領台初期、女子、子供が少なかったため、そのような姿が見られないのは当然であろう。しかしながら、何故ほかの正月の風景も見られないのであろうか。前掲の記事の後半には、

この辺一帯の人九州の西南部若くば山陰山陽よりの移住者多ければ本国にては太陰暦にてこそ正月したらんに揃ひに揃ふて新暦の正月したるは心地よくも亦王化の洽きを感激すべきこととや謂はん・・・<sup>10</sup>

と記者が続けて記している。

日本内地では、明治5年11月9日＝1872年12月9日の改暦詔書で、太陰太陽暦を太陽暦に切り替え、明治5年12月3日を、明治6年＝1873年1月1日とした。しかし当然ながら、当初は近代の時間とそれへの強制は人々の摩擦や抵抗を招いた。当時の新聞は文明の文脈を明示しつつ、旧習により生活し新暦を従わぬ人々の姿を伝えた。たとえば、『郵便報知新聞』（第36号、1873年2月）は、青森県下では「民間旧暦に依る者多く、一月一日を祝する者僅かに百分の一なり」と憂えてみせる<sup>11</sup>。明治十年代に入ると大都市の市街地では徐々に新暦の正月が定着し始めた<sup>12</sup>ようであったが、地方において、変化をみせるのは、二十世紀、それも日露戦争後のことである。農村・地域自身が、日露戦争後に地方改良運動のなかで太陽暦＝近代の時間を遵守することを試みていた<sup>13</sup>。言い換えれば、日本内地においても、1897年のこの頃、都市と地方の差や社会階層の違いにより、旧暦を中心とした伝統的な民俗のリズムによっており、旧正月を過ごす人が存在していた。

こうした日本内地の状況からして、当時の在台日本人の出身地と合わせて考えてみると、寂しい新正月の風景はより容易に理解できる。筆者がかつて『台湾総督府統計書』に基いて「現住内地人本籍別」の統計資料を累計した結果によると、1897年から1904年まで在台日本人の出身地が最も多い順位は、熊本県、鹿児島県、大阪府、東京府、広島県、長崎県、山口県、兵庫県、福岡県という順位であった。また、地方別から見れば、九州、近畿、中国、関東という順であった<sup>14</sup>。つまり、植民地台湾に流れてきたのは、東京のような大都市の出身者もいたが、九州、近畿地方の人々が多く占めており、まさに引用文が語る「九州の西南部若くば山陰山陽よりの移住者」が

多かったのである。恐らく日本内地にいたとき彼らはまだ旧正月を過ごし、台湾にやってもそのままの時節感で生活をしているのではないかと考えられる。一方、この記事を書いた記者が日本内地と同じような正月の風景を予想していたことから、彼は多分日本内地で都市出身であろうと推測できる。彼が台湾にやってきた日本人に向けて「新暦の正月をすべし」と説いていることは、新聞が演じていた役割を説明している一方、在台日本人が未だに旧暦で正月を過ごす現象をも示している。

時間が少し下の 1901 年の旧正月に一記者は「陰暦除夜の夕」を題して以下のような短文を綴っている<sup>15</sup>。

今宵ふるさとに在りなば親しめる友だち方丈に打つどひ桜炭のほひ床しき炉を取り囲みて茗を煮つつ語りも明かさん  
 ふけ行く夜半の鐘の音の一つ宛に春あけそむる心地して初鶏初がらすの声諸共に除夜の別れを告ぐるになん  
 茲の島も陰暦をもて春を迎ふるからに耳そばだつればあなたこなたの土人町には鐘太鼓の響冴え渡りて爆竹の音の寝耳かすかに聞ゆる  
 蚊屋に寝て除夜の鐘きくやどりかな  
 はつとりに古里の夢のやぶれけり

この文から、陰暦の正月にあたって、一日本人として表だってどのような活動をしたのかはこの短文から判明できないが、少なくとも、かれは日本内地において旧正月を過ごすことが分かり、しかも、台湾に渡ってきても、彼が考える正月はやはり陰暦の正月であり、台湾人と同じ時間リズムで、爆竹の音の中で正月を過ごしたことが分かる。更に、領台八年後の 1903 年になっても、旧正月にあたり迎年の祝賀をしている本島人の中に内地人が「つり込まれて共に恭喜と寿述べ」<sup>16</sup>る姿さえ見られた。

とりあえずこのように言えるだろう。つまり、日本内地においてもともと異なる生活リズムの人々が台湾領有を契機として、一挙に台湾に流れ込んできた。しかしながら、同じ空間に置かれていたとしても、依然として、もともとの生活ペースを保有しており、同じ「内地人」でありながら異なる生活リズムにより新と旧二つの正月を迎えていた。それで、一つの植民地空間の中に、台湾人が旧暦、日本人が新暦で正月を過ごすという重層的な時間が見られるだけではなく、実際には、太陰暦併記が廃止される 1909 年以前、日本人の一部も旧暦を過ごす現象が窺い知ることができ、「重層的な時間」は同じ「内地人」同士のあいだでも存在した。

さらに、重層的な時間のなか、重層的な空間の圧縮も見られる。日本人は日本の各地方から、植民地台湾一箇所に流れ込んできたため、様々な地方的な行事も一つの空間の中に圧縮された。当時の人々も身近に感じられるであろう。1908 年の一記事は以下のように語っている。

臺北には日本全國の人が集まつて居るからお正月の祝事もとりどりで何れも御國風を其儘にやつて居る様子である尤も台湾に来る前に東京なり大阪なりの都会生活を味わって

来た人々の間には自ら一致する処もあらうが中には自分の村から城下も見ずに一直線に渡台して来た人などは随分滑稽をやらかすそうで内地ではお正月は旧暦ですのに此方じや新暦ですヨ—と云ふた人さへあった・・・<sup>17</sup>（下線は引用者。）

引用文の後半は前述してきた「内地人」同士のなかでも生活のリズムが違い、時間的な重層が現れていたことのもう一つの例証である。下線を引いているところは、そのような時間の重層のなかで、新暦の正月、旧暦の正月にせよ、各地方からの日本人がそれぞれ各地の習慣で正月を迎えている風景を伝えている。したがって、もともと都市部しか行われぬ「出初式」は素早く台湾に移植され、輸入される部品のなかに大阪羽子板も東京羽子板も見られ、植民地台湾での商人の大半を占めた関西人により関西風の初荷が持ち込まれた<sup>18</sup>。そして、新聞の中に表出されない旧正月の行事も家の中ではそれぞれ各地の風俗と習慣により行われたのであろう。すなわち、時間の重層だけではなく、日本内地の様々な空間も、植民地台湾という空間において、積み重なって圧縮されている。

## 2. 新正月の風景

旧暦で正月を過ごす日本人が存在していることは上述した手がかりから確認できたが、新聞のなかで台湾人の旧正月の状況しか報道されなかったため、在台日本人の旧正月時の具体的な振る舞いについては窺い知ることが出来ない。その一方、新暦のお正月の風景について、領台初期には前掲の新聞記事が指摘するような寂しい風景であったが、伝統的な行事の描写もその頃からぼちぼち見られるようになった。1898年から既に初荷が行われたが、新聞で具体的記録が確認できる1899年の初荷は二軒しかやっていなかった。出初式も1903年頃に台湾に持ち込まれ、1月4日に台北の三市街で行われた。同じ頃に、羽子板など正月の玩具も輸入された<sup>19</sup>。ただし、この頃伝統的な行事の描写が見られ始めたとはいえ、盛んであったとは言えない。

明治四十年代に入ってから、在台日本人が新暦で正月を過ごすことも徐々に定着し始めた。それは、内地における日露戦争以降地方改良運動の影響に連動し、新しい渡台者が新暦で正月を迎えることが考えられる。また、時間の経つにつれて在台日本人の人数が増え、それとともに女性の渡台者も増加したため、羽子板などの正月の玩具を遊ぶ姿も増えてきた。

更に、1909年（明治43年）11月に、太陰暦が廃止となることが公布された<sup>20</sup>。「太陰暦廃止」というのは、1910年からの暦には、それまで太陰暦併記という形を廃止し、陰暦の諸季節を太陽暦に割り当て年中行事を編纂したことである<sup>21</sup>。この1909年を境界として、それまでは日本人が旧正月を過ごす現象が新聞から窺いえたが、その以降は微かな手がかりさえ見られなくなってきた。それは、在台日本人の特徴と深く関係していると考えられる。彼らは日本内地の各地方から来たが、台湾に流れ込んでから殆ど都市に住んでおり、しかも、第一次産業従事する者の数は極めて少ない。国勢調査による1905年在台「内地人の有職人口」の状況を例としてみると、総数33131人中、農業と水産業に従事する人数はそれぞれ323人、175人しかおらず、公務員、商業、工業、交通業に従事する者が殆どである<sup>22</sup>。もともと太陰太陽暦は農耕生活と深く関係しており、太陽暦を使ったら農民と漁師に不便をもたらすと不安は依然当時の人々の胸にあった<sup>23</sup>。

それに対し、殆どに第二次第三次産業に従事する在台日本人にとって、太陽暦は取り入れやすいものであった<sup>24</sup>。また、「旧暦＝迷信」、「新暦＝科学」と意味づけられたので、「内地人」が台湾人の模範になるべきと求められことも、在台日本人の新暦採用の動きに作用していたのであろうと考えられる<sup>25</sup>。

上述した幾つかの原因で在台日本人の間では新暦で正月を迎えることが定着し、迎年の賑やかな「日本式」の風景や伝統的な行事も台北の町で上演されるようになった。門松飾り、翻る国旗、初東風に吹動される軒の注連、行き交う賀客、羽根つきを遊ぶ姿、恵方詣りの人ごみなどの風景が毎年の新聞記事に描かれている。また、歳末の大売出し、二日の初荷、四日の出初式なども台湾領有初期より、年年と盛んになってきた。ちなみに、出初式の式場は、1911年までに石坊街公園、城内公園予定地（後の新公園）、武徳会体育倶楽部運動場などと転々として、1912年から毎年新公園の開催で定着した<sup>26</sup>。式場の変更は出初式を公の活動から市民たちが広く参与できる活動に変身させたことをも意味するであろう。

一方、毎年1月1日に行われる「名刺交換会」は冒頭に述べた「年中行事」の表に「社会的行事」として掲げられ、植民地台湾で重要な新年イベントである<sup>27</sup>。そのはじめは「官民の知己朋友特に多く其の往来も必ず頻繁なるべければ寧ろ時日を期して一定の場所に会合し其れ等の煩雑を避け」<sup>28</sup>ようという考えから領台四年目の1898年年末に台北で発起した。会場が官吏倶楽部の淡水館、台北倶楽部と転々し、1909年以後は鉄道ホテルで開催されるようになった。1900年に四百五十人ぐらいの参加で、年に連れて増えつつ1931年に二千人にも達した<sup>29</sup>。また「婦人名刺交換会」もあり、毎年の1月6日前後に開催されていた<sup>30</sup>。集会の進行は、開会の挨拶が終ると君が代の吹奏、続いて古参者の発声で両陛下万歳を三唱し、その後宴会に移り参加者一同歓談を尽くし、お開きとなる。出席者には会員名簿を贈呈するのが例となっていた<sup>31</sup>。活動の性質から見れば国家的色彩が濃厚であるが、「外地」におかれる日本人にとって、名刺交換会は人間関係を維持しながら、新しいネットワークを作っていく場を提供する、官民紳商の年に一度の盛会であった。

台湾で正月の遊びや行くところが少ないと当時の新聞記者がしばしば指摘していたが、1900年代からは演劇や芝居などの興行が見られる。また、温泉の名所の北投、桃と桜が咲く草山が正月の遊び場となり、市民の足がよく運ぶところとなった。圓山一帯は台湾神社が立地するところだけではなく、運動場、動物園などもあり、恵方詣りを兼ねて散策もでき、在台日本人の正月の娯楽場となった。毎年新年の初詣には、台湾神社に参拝する人が非常に多かった。台北市街から台湾神社に繋がる勅使街道は、このときに当って、徒歩の人ごみ、人力車、自転車、自動車で、「人車織る」のような雑踏を極めたという<sup>32</sup>。台湾神社の存在によって、在台日本人の「内地式」の生活と文化が、台湾にそのまま滑り込んでいる、あるいは、台湾神社の存在は彼らに「内地式」の文化と生活を台湾に持ち込むことを可能にしたともいえよう<sup>33</sup>。ここで特筆したいのは、これら在台日本人が足を運ぶところ、北投、草山、圓山、いずれにせよ、日本内地を投影するところであり、そこでの活動も日本の伝統的な活動と深くかかわるものであることである。伝統行事のほか、新興の娯楽は1920年代から盛んになってきた。活動写真はその代表であり、昭和に入ってから、映画館は正月に市民の足がよく運ぶところになった。また、1915年から台北公園での野

球の試合の報道は既にあり、野球の観戦も正月の一活動となった。

## 第2節 本島人の正月

日本は前述したように、1873年に太陰太陽暦を太陽暦に切り替えた。しかしながら、1909年以前には台湾では旧暦は特に禁止されておらず、新暦も強制的に台湾人に押しつけようとしなかった。その例証として、新聞には、新暦と旧暦の年月を同時に標示し、おおやけの地方行政単位さえ、旧正月に際して休み、区長が台湾人の風習で旧正月の間に「春酒」を饗したところもあった<sup>34</sup>。また、学校制度では、呂紹理の研究によると、1896年から1904年の間、学期のアレンジは三回の変動があった。1896年の〈国語伝習所規則〉が4月1日を学期のはじめと定めたが、1898年の〈台湾公学校規則〉は、台湾人が旧正月が終わってから書房に入るという伝統に従い、1899年から毎年2月1日を学期のはじめとした。しかし、このようなアレンジは後藤新平のいわゆる「生物政治学」の主張と一致するが、総督府自身の会計年度と一致しないのである。そのため、1904年から、〈公学校規則改定〉により、学年の年首を毎年4月1日とさだめ、以後1945年まで変わらなかった<sup>35</sup>。このうち、「旧正月が終わってから学校が始まる」という台湾人の習慣に基づいて2月1日を学年の年首とする1899年から1903年は、実際に毎年学校が始まる前後に旧正月に突き当たり、新聞の片隅に学校休業を報ずる記事が散見する<sup>36</sup>。また4月1日始まりに変更になってからになっても、例えば1906年のように、旧正月に際して殆どの学校が自然休業状態になった<sup>37</sup>。ここから、領台初期「正朔を奉ずるべし」という言論が見られたものの、実際に台湾人に旧正月の禁止や新暦の正月を強要することはなかったことが分かる<sup>38</sup>。それは、統治初期児玉・後藤の生物学原則に基づき、旧慣を尊重すること<sup>39</sup>と一致する一方、前述したように、日本内地においても、そして台湾に移住してきた日本人であっても、旧暦で正月を過ごしていたことに関わるであろう。そのため、台湾人を新暦に「矯正」することには特に力を注がなかった。

### 1. 旧正月の風景——在台日本人の旧正月の体験

上述した背景のなか、在台日本人はどのように台湾人の正月の風景を描いたのか。彼らの視線はどのような風景や風習に向いているのか。そして、そのような語りから何が見えてくるのかを探求してみよう。

台湾総督府は1898年から旧慣調査を始め、1900年に台湾慣習研究会、1901年に台湾臨時旧慣調査会を成立し、台湾における四時の祭典、年中行事も調査の対象となった。正月に関しては、家庭内の儀礼、食事から、家庭外にも現れる服装、飾り物、活動まで至り、民俗的な調査を展開し、その作法を詳しく考察し記録している。慣習記事や風俗誌に最も紹介されるのは春聯の形式、意味、書き方である。ラッパ、太鼓、銅鑼、笛を吹奏しつつ市中を徘徊する年頭専用の臨時楽隊「噴春（吹春）」や、賭博の風習、爆竹の種類なども常に特筆される対象となった<sup>40</sup>。台湾慣習研究会の一員でもある小林里平は、季題趣味の提供のために編集した『台湾歳時記』の中に、春聯、噴春、飾り物の長年蔗、食べ物の長年菜、焼金（祖先を祭るとき金銀の箔紙を焼く）などを季語として収録し紹介している<sup>41</sup>。

一方、民俗学者以外の日本人にとっても旧正月は見物の時節である。毎年この時節に当り、記者たちは必ず「土人街」に足を運び、台湾人が如何に新年を迎えるのかを窺い、街の風景を描いて新聞に載せる。そのなか、「必見」と思われるのは春聯であり、「毎年此季節になると土人街を散歩して此の對聯を読むのを楽しみとして居る」<sup>42</sup>日本人は少なくない。春聯の内容を紹介する記事ほか、個人の時論にも紙幅を割って春聯を鑑賞、分析する文章さえ見られる<sup>43</sup>。赤い春聯、赤い名刺、赤の紙が貼り散らされる光景はよく描写され、「本島人は何でも紅くなければ目出度くない」といわれるほど日本人にとって満目赤い風景は注目を引いた。また、夜通し鳴らす爆竹、市街を歩きまわす「吹春」の楽隊、香を執り金紙を焼く人々の姿も日本人が特筆する旧正月の情景である<sup>44</sup>。それらの描写によって、当時の在台日本人の目に映じた色、音、匂の風景が想像できると同時に、彼らの好奇心の対象は台湾領有初期の旧慣調査活動の視線と重なることも窺われる。学術的な関心と知的な調査結果は雑誌、報道、歳時記などを通して、在台日本人の通俗的な認識を作り上げ、彼らの視線をも左右したと考えられる。それら色、音、匂いの風景は台湾趣味として捉え、在台日本人が認識、感知、体験した「本島人の正月」の象徴的な風景となった。

異色の溢れる風景以外に、最も描写されたのは「車夫の影もなく豆腐売の音が鐸の音も響かず物売の聲さえ聞え」ないことである<sup>45</sup>。ここから、何が在台日本人の生活と密接にかかわっていたのかを見えてくる。当時、日本人と台湾人の居住地域は基本的に分けているが、車夫、行商など行き来する人々の移動は、雑居地域に住まない大半の在台日本人の生活を台湾人の生活に繋いでいた。普段の日には、雑貨屋、野菜売り、塩屋など、一日十何人もやってきて、行商人の売り声は日常的な風景の一部を構成している。だが、旧正月になると、それらの声が聞こえなくなり、非日常的な雰囲気を感じられ、生活上の不便にもなりかねない。経済上活動においては、台湾人とのみ取引をする「内地人商店」は大分休業で、台湾人労働者の休業によって供給不足の状況を生じ、あるいは臨時休業をせざるを得ない実業もある<sup>46</sup>。台湾人と商売の取引を持っている日本人は台湾人の時間リズムに合わせて旧暦で決算する場合も多い。在台日本人の生活はそのような形で台湾人の生活リズムに巻き込まれていた。また、台湾人から「台湾餅」をもらったりすることは在台日本人の共通する経験であったともいえる。植民地台湾在住の日本人はこのように様々な形で旧正月を体験し過ごしていた。

そして、このような体験は在台日本人が台湾から引き揚げた終戦後においても、台湾経験の持ち主によって記憶されている。1931年に台北の建成小学校から卒業した卒業生たちは卒業50周年を記念して『思い出』というアルバムを作成した<sup>47</sup>。このアルバムは一年間十二ヶ月のサイクルによって建成での生活を綴った。二月のところに、以下のように振り返っている。

又、二月の思い出としては、旧正月がある。旧正月は、新正月よりも賑やかで、夜の明けない内から爆竹の音が聞こえていました。

台湾の方々の家では入り口の貼り紙も新しくして、正庁の間の先祖の祭壇の前には、盛り沢山のご馳走が並べられ一家を挙げて新年を迎えていた光景が目につぶ。

友人の家に招かれ、お正月料理を腹一杯いただいたこともありました。特に今でも懐かしいのは台湾餅です。生のまま、焼く、油で揚げる……色々な料理方法で食べました。おみ

やげに貰った分は、薄く切っただき餅にし、姉弟にかくして焼いて食べたこともあった。士林に居られた李進徳さんのお家に行っているいろいろごちそうになったことも忘れられません<sup>48</sup>。

描かれたのは昭和初年台湾の旧正月の風景である。このアルバムの編纂者は当時日本人が集住する大正町に住んでいた<sup>49</sup>。だが、彼が通う小学校は家の近くであるが、台湾人が多く住んでいる建成町に立地する<sup>50</sup>。家にも爆竹の音が聞こえたり、移動するうちに旧正月の光景、台湾人の身振りが見えたりし、さらに友達の招きによって身近に旧正月を体験していた。台湾生まれや台湾育ちの日本人にとって、前述した色、音が成り立った台湾人の旧正月の風景は、二月の思い出であり、風物詩でもあった。そして、アルバムの綴り方から、旧正月は一年のサイクルのなかで二月の行事として位置づけられたことが分かる。

以上、在台日本人の旧正月に対する描写から、自分が旧暦で正月を過ごすのかどうかにはかわらず、彼らが、台湾人の旧正月の光景、雰囲気にも囲まれ、「見物」の形で自分の風習と異なるもう一つの正月を体験していたといえる。また、台湾人との日常生活での僅かな接触ではあるが、こうした接触から、日本人も確かにそのような生活リズムに左右されざるを得なかったとも言える。しかも、在台日本人にとっての、このようなもう一つの正月の体験は、日本人自身が旧正月を過ごさなくなるときも続いており、戦後になっても思い出として記憶されているのである。

## 2. 二つの正月と台湾人——文化変容

先述したように、領台初期台湾人に新暦で正月を迎えることを矯正・強制しなかったが、いくつかの要因の影響で台湾人の正月の風景も変容していった。

まず、1899年に改正新関税が実施されたが、その際「関税改正の結果我が内地より輸入される姿となり…本年より往々内地風の名刺を注文するもののある」<sup>51</sup>との報道があった。台湾人の正月の雑貨はもともと福建、アモイ沿岸から仕入れられるものが多かったが、関税改正以降、泉州郊も漳州郊も不振に陥り、香港のみが横ばいに維持されるが、日本からの輸入は多くなってきた。

日本から輸入される<sup>するめ</sup>鯛、キンコ、貝柱、乾貝などは正月だけではなくお盆や祝儀事に際しても台湾人の食卓に浸透し始めた<sup>52</sup>。その一方、日本人との商業上の取引のため「内地風」の名刺を使う人も現れてきた。改正新関税の実施により、日本からの影響が強まってきて、台湾人の生活文化に大きな影響を与え始めていたことが見て取れる。

1909年陰暦併記が廃止される前にも、台湾人の正月の習慣もわずかながら変わりつつある傾向が見られ、正月が元来の習慣と異なる様々な形で過ごされ祝われた。たとえば、城内や新起街などの「内地人街」に住んでいる台湾人は旧正月のとき、平日の如く営業する人が現れてきた。旧正月に、内地人に見習って歳末売出しや福引をやる店が出てきて、歳暮売出し大安売など日本流に書いて紅提灯を吊るす光景が見られるようになった。また、新正月に、日本人と付き合い及び取り引きのある台湾人が正月の晴れ着を着て回礼する光景も多く見受けられるようになった<sup>53</sup>。これらの現象から、文化変容が最も起りやすいところは商業関係の面であることが窺われる。一方、迎年の儀式は旧正月で行うが、新暦の正月に国旗を掲げる人家が少なくなかった<sup>54</sup>。

後述するように、太陰暦併記を廃止する令が出されても、生活リズムに急速な変化が生じたわ

けではなかったが、新暦で正月を迎える台湾人の姿が徐々に見受けられるようになった。たとえば、1913年の新正月には、次のような光景が見られた。

紅紙の新春聯を貼つけ市区改正と相俟ちて面目を一新せり・・・鶏の聲東天紅を告げ渡る  
や爆竹の聲凄まじく・・・近年内地人の習慣に倣い名刺受など設けたる家多く又断髪の結果  
は洋装するもの増え元日二日の市中内地人に見紛える本島人を多く見受けた<sup>55</sup>。

この引用文の中に注目してほしいのは、新暦の正月に際して、自分の習慣を用い、爆竹を鳴らしたり、春聯を貼ったりしていた台湾人がいると同時に、日本人の文化様式に見習う台湾人もいる点である。前述の数例に加えて、この時期（1910年代前後）は過渡期ともいえよう。つまり、新しい時間制度にもととの慣習を取り入れたり、或は元来の生活リズムに新しい異文化の要素（たとえば旧正月の大売出）を混じりこんだりしていた現象が起きている。普遍化したとは言えないが、新と旧の二つの正月が人によって様々な形で現れてきた。こうして正月の変容は、時間と文化の双方での混淆として始まったのである。

### 3. 新正月への推進

1909年11月に、いままで太陰暦併記という形が廃止され、1910年から台湾では日本内地と同じように新しい暦が頒布されたと同時に、清国の暦の輸入も禁止された。しかしながら、台湾人が旧暦に慣れていたので、全く使わないことが不便をもたらすのを配慮し、台湾人の不安を晴らすため、台湾日日新報に新しい体裁の暦を紹介し、どのように「月齡欄」から旧暦の日にちを推算するのかを説明している<sup>56</sup>。つまり、このとき太陰暦が廃止されたとはいえ、人々の生活リズムを太陽暦に強制的に転換させようとしなかった。むしろ台湾人のもととの生活リズムと時間制度に対して暗黙のうちにこれを許していた。一ヵ月後にやってくる新正月に、新庄支庁管内の更寮、舊塹という二つの庄が保正の発起で新正月を迎えることを強制した記事が見られる以外に、台湾人が新正月を賑わう記事が見当たらず、陰暦廃止される前の正月の風景と殆ど変わらなかった。しかも、陰暦廃止二ヶ月後の旧正月に、台湾人の賑わいぶりは少しも衰えていなかった。年越しの用意をしている買い物客で雑踏をきわまる街、鳴り響く爆竹、新しく貼りかえられた門聯などの風景が新聞紙に躍如し、太陰暦廃止の令は台湾人の生活リズムを急変させなかったことが分かる<sup>57</sup>。

しかしながら、その後、「墨守舊制」や「怪現象」などの指摘の声もそのような状況のなかで現れてきた<sup>58</sup>。1916年11月に台湾日日新報の漢文欄の記者たちと各地方の有志者が発起して「改暦会」を結成したが、その趣旨は「本島人」を「内地人」と同一の太陽暦で正月を迎えさせることであった。「改暦会序」は連日紙面に掲載され、その要約は以下のようにまとめられる。まず、新しい王朝が定まったとき、正朔を改めることを以って、君主が周知されるのは古来のものである。台湾は版図の変更は既に二十年も経ったが、「本島人」が未だ旧暦に従うのは義に適わぬこと。また、太陽暦の推算のほうが陰暦のそれより精確だし、世界では太陽暦を使うのが多数である。さらに、陰暦を発明し、四千年間それを使い続けてきた「支那」でさえ世界の潮流に従い太陽暦

を使うようになったのだから、況や台湾人においてをや<sup>59</sup>。改暦の正当性と必要性を「正朔」、「科学性」と「世界の潮流」に訴えたのである。

会規においては、「会員は大正六年一月一日から改暦を実行し、一切の迎年の儀式をこの日に行う」とし、「暫く旧暦の正朔を記念祭とする」と定めた<sup>60</sup>。だが、会規がはじめて発表されたとき、新暦で正月を迎えようという趣旨が打ち出されたが、どのように迎えたらいいいのかについては全く言及されなかった。「改暦会序」が発表されてから三日後、実行上の都合のため、実行方法を会規の第七条を以って以下のように補足した<sup>61</sup>。

実行方法について、新に従えば、国旗を掲げ、注連飾りを掛かり、門松を設ける。旧に従えば、桃符（門聯）を換え、爆竹を鳴らし、提灯を吊るした五色の布などで華やかに飾り立てる。個人の都合により(新と旧のやり方)どちらでもよい。年賀の名刺は赤か白かかまわない。三日間休業し、共に祝意を申し上げる。

以上の会規から、「改暦会」は新暦で正月を迎えることだけ要求し、迎え方は日本式の習慣で実行することは強く求めなかった。換言すれば、時間リズムの統一だけ要求し、文化内容の一致を強制しなかったのである。

「改暦会」結成後、加入者数は三万人ほどに達したと揚言しているが、『台湾日日新報』に掲載した加入者のリストから、参加者の大半は区長、甲長、保正などの人物であることが窺われる。これらの地方勢力を握る人物の加入により、地方への影響力がある程度増加することが考えられる。その結果、新暦の正月の風景も大きく変わってきた。1917年の新正月に、改暦会に加入した人々が「新年の行事は内地人同様に之を行ふ事として大稲埕の一部は既に元日には内地式の注連を張りたるものあり艋舺方面にては約八九分通り之を実行したる」<sup>62</sup>という風景となった。ただし、毎年門松の取寄せについては、強制的態度を帯びており、日本人が集住する「城内」では消防組が請合い、台湾人が集住する艋舺と大稲埕は壮丁団が請合っていた、と『台湾民報』が指摘している<sup>63</sup>。つまり、そのような風景を支えていたのは、保甲の壮丁団<sup>64</sup>があった。

新正月の風景が大きく変わっても、旧正月が衰退していったというわけでもない。同年（1917年）の旧正月に、やはり「門戸を鎖して謹んで新年を迎へて居」り、「人力車夫も其の多くは休業するので市内には車の影が甚だ疎である、野菜売り、豆腐屋、肉屋など総て本島人の稼ぎ人は悉く休業した」というふうになった<sup>65</sup>。改暦会は「暫く旧暦の正朔を記念祭とする」と定めたので、その現象について特に批判もせず、ただ「之等の連中は新旧両度のお正月を迎へる訳で、遊ぶと云ふ点から全くお芽出度い事だ」と受け止めた。このような現象は台湾人がやはり旧正月を迎えることを物語っている。

新正月の推進には、改暦会の成立と同じ頃各地で次々と発足した同風会も一役を買った。同風会とは、1914年板垣退助の「台湾同化会」の提唱の影響を受け同年の11月に桃園庁三角湧支庁樹林区長の黄純清が旧慣の改革と教育の普及を趣旨として「樹林同風会」を設立したのが嚆矢である。その後は隣接の地域に拡大し、1916年には三角湧支庁合同風会が設立された<sup>66</sup>。台北の場合は、1919年1月「台湾教育令」が發布された際、士紳階級の「本島人有志」は新教育令の

精神発揚を掲げて、1919年4月に艋舺同風会、5月に大稻埕同風会、さらに1920年7月に、台北庁聯合同風会を設立し、徳教の振興、国語の普及、習俗の改善を目標としている<sup>67</sup>。主な活動の中には新暦で正月を迎える宣伝もあり、新暦の実行についてある程度の推進力を持っていと見られる。たとえば、三角湧同風会は1916年の年末に臨時会議を開き、1917年の正月から新暦を用いるように決議し、名刺交換会も開催した<sup>68</sup>。また、1919年末に、艋舺、大稻埕及び淡水の各同風会は1920年の正月を新暦で迎えることを決議し、如何に祝うべきかについて、

- 一、元日より三日間各戸国旗を掲揚する事、
- 一、元日（二日及び三日は可成）休業し祝意を表す事、
- 一、各戸に門松を立て注連飾を為す事、
- 一、各戸門聯の張替を為す事、
- 一、元日は台湾神社竝に諸廟に参拝する事、
- 一、祖先の霊に対しては従来旧暦の例に準じて礼拝をなす事、
- 一、可成吹春其他の催しを為し市街を賑す事、
- 一、名刺交換会を開催する事

と決定した<sup>69</sup>。実行の項目から見れば、新暦で正月を迎えるに際して、旧来の習慣が残されながら、国旗、門松、神社参拝、名刺交換会など日本式の要素を加えた形が見出せる。改暦会と比べれば、同風会は門松、注連飾りなどを義務とし、文化内容の一致をより強調している。さらに、1920年の旧正月を控えて艋舺同風会は例会で「旧暦の元日に市民一同営業する、賭博は絶対禁止、吹春は禁ずる」と旧正月の過ごし方をも規定した<sup>70</sup>。

改暦会、同風会の鼓吹に、保甲の推進、強制と学校の教育により、人々は新正月を迎えるようになった。旧正月は1920年前後に改暦会、同風会に影響を受け一時的に不景気に陥り衰退していたように見えるが、1937年日中戦争勃発まで大稻埕、艋舺の旧正月の賑わいぶりが毎年新聞で報道されている。旧正月をやめずに、異なる行事で新と旧二つの正月を迎える人々が殆どである。新正月に国旗を掲げ、門松を立てる一方、旧正月に春聯を貼り、お寺に詣で、休業する、という二つの正月を迎える風景であった。街の風景のほか、新正月に年賀状の遣り取りをし、付き合いのある人に賀正する反面、旧正月に祖先を祭り、一家団欒、親戚に賀正するという習慣が一般的である。林献堂を例として言えば、新暦の正月に年賀に訪ねてくる人が多くて、その中に台湾人もいるが、校長、教員、巡査などの日本人が多く占めている。年頭の挨拶が終って、一新義塾に元日の祝賀式に参加し、受け取った年賀状に返書する。一方、旧暦の正月には、祖先を祭り、一家団欒、親戚の家へ年賀に出かけるのが恒例であった<sup>71</sup>。

ただし、「改暦」の推進には各地方により強弱があった。それは地方勢力を握る保甲の動向により大きく左右されるからであろう。たとえば、台中保甲聯合会は1916年の旧正月を控えて、「陰暦廢止に關し種種協議する處あり來る可き陰歴の正月には従来旧慣を一切行はざる事に決定」<sup>72</sup>し、祖先の祭り、道士の吹春も新暦新年で実行し、門松は各戸必ず立てることと定めた<sup>73</sup>。1919年から保甲や同風会により、旧暦の正月が新竹、台南など各地方で禁止された記事が続々と

見られるようになった。それに対して、台北市の改暦は地方より遅れている現象が呈しており、二つの正月を迎える風景は1937年まで続いていた。

一方、台湾人の知識人層はどのように「改暦」を見ていたのか。「台湾人唯一の言論機関」といわれる『台湾民報』は、門松は内地では廃止されたところが少なくなく、時代に遅れるものとし、1920年代後半から門松の強制を批判し始めた<sup>74</sup>。具体的な理由を「台湾人が正月に門松を樹てないことは、習慣の相異から来ているもの」であり、「門松を立てる為に二、三円も取られては、経済的貧弱な台湾人の苦痛とする所」でもあったと述べ、また、「嫌蒿繩は台湾では寧ろ凶事に使ふ事が多い」と注連飾りに喪中行事のイメージを投射し、台湾人の特殊な風習を尊重されてもらいたいと主張している<sup>75</sup>。しかしながら、文化への同化を反対するが、新暦の実施を賛同する<sup>76</sup>。「国暦を提唱する」を題する文章の中で、太陰暦の発明は科学によるものではないため、発明されてから異端の説と迷信の色彩が満ちている一方、太陽暦は科学的であり、最も進歩している暦法でもあるため、太陽暦を採用することは世界と同風することを意味する、と述べており、二つの正月を祝う現象を「不経済」、「不自然な社会」として批判した<sup>77</sup>。そのような言説は二つの正月を祝う一般大衆の実状を反映する一方、同化せずに太陽暦を励行する知識人層の態度は「同風」を呼びかける士紳階級の態度とも対照的である。

以上述べてきた正月の風景をまとめてみれば、台湾領有初期以外に、日本人は基本的に新暦の正月を過ごすのに対し、台湾人は基本的に旧暦により生活を過ごす、学校教育、改暦会、同風会、保甲の推進により、地域や社会階層によって新暦で正月を迎える人が徐々に増加し、更に二つの正月を迎える風景が定着していった。このように、日本人と台湾人の間に、二つの生活リズムを分かれているだけではなく、初期には日本人と日本人の間、中期から台湾人と台湾人の間でも、すれ違う時間の姿が浮かび上がってきた。

### 第3節 時間の交錯

上述した台湾人と日本人の時間リズムの違い、また、日本人自身、そして、台湾人自身の間ですれ違う時間が生み出される以外に、日本人にせよ、台湾人にせよ、国家の時間と対面しなければならなかった。国家の時間リズムはどのように人々の生活に介入するのか。それに対して、人々はどうやって国家の時間リズムを生活の中に取り入れたのか。一方、様々な時間リズムの共存のなか、どのような風景が現れてきて、そのありようはどうであったのか。本節はこの二つの問題について考察を加えてみたい。

#### 1. 諒闇中の新年——日本人・台湾人の生活のリズム／国家の時間

台湾領有一年半後の1897年（明治30年）1月11日、英照皇太后が死去し、臣民の喪期が30日間と定められた<sup>78</sup>。そして、三週間後の2月2日はちょうど旧正月であった。当時、台北の街の風景は以下のように描かれている<sup>79</sup>。

市内戸毎に半旗は掲げられ諸官衙学校銀行諸会社其他重立ちたる商店は休業して哀意を

奉表し土人に在りては折節陰曆元旦に当りたれども警察官の注意に依り旧來の慣例なる爆竹をも成すもの少く盛装したる廻禮者も見受けず深く戸を鎮し謹みて年を迎へたる有様は何となく打ち濡めりたる景況なり

これは台湾人にとって日本統治下に置かれてから二度目の正月に当たった。当局は「皇太后陛下崩御に関する告示」、「皇太后陛下崩御ニ付喪期間歌舞音曲停止」<sup>80</sup>などの公文を出しただけではなく、新付の民に対して、警察の力によって、もともと皇室に属する時間を「外地」にいる「臣民」まで認識させ、同調を強制した。この意味での「国家の時間」の介入により、この年の正月の風景は普段と違い、異様な光景を呈した。しかし、旧正月の前日に台湾人の街である艋舺では人出が多く、景気が一層色めき賑わったという記事がある<sup>81</sup>。そこから、人々はやはりせつせと正月の準備に勤しんでいたことが分かる。つまり、表の祝賀は抑えられたが、裏の人々の実際の生活リズムは少しも「喪期」という国家の時間リズムに影響されていなかったと考えられる。

1912年(明治45年)7月30日に明治天皇が死去した。天皇の大喪にかかわる服喪(「諒闇」といわれた)は1909年の皇室服喪令により、天皇、皇族から国民まで一様に一年間とされた<sup>82</sup>。すなわち、この日からの一年間、すべての祝祭、行事は、帝国の時間である「諒闇中」と対面しなければならない。7月30日に始まる一年間の服喪の中で最も重い第一期の服喪(7月31日～9月17日)が、台湾において総督府各庁など上からの指示に基づいて実施された<sup>83</sup>。しかし、第三期の服喪に当る年始年末の過ごし方について、1912年(大正元年)11月から『台湾日日新報』でしばしば「新年の問題」としてとりあげられ議論されている。その内容から、行政的にはその対応が定められていなかったこと、そして、記者たちが自主的に官庁に問い合わせていることがわかる<sup>84</sup>。裏返して言えば、上から規定していなかったのに、記者たちが自主的にこの問題を意識したのは、それまで社会全体が服喪の雰囲気の中に囲まれたことと関連する一方、この年の新年は明治維新以後はじめての諒闇中にくる新年であったため、参照できる前例もなく、如何に迎えべきかは在日日本人が迷う問題となり、盛んに議論されるようになったのである。これは日本内地の日本人にとっても同じような状況であった。特に、門松を立てるべきかどうかについての意見は分かれ、維新以前の例を紹介する文章や西洋の例を取り上げる議論さえ見られる<sup>85</sup>。それらの言論から当時の知識人が新と旧の選択の間にさまよう姿が見られる。また、諒闇中の新年に関する多岐にわたる問題について、東京での各説とその大勢が紹介された<sup>86</sup>。記者たちは盛んな議論の度に官庁に問い合わせた結果、「一般人民は諒闇中なることを脳裏に置いて新年の恒例を祝賀するに於いては毫も差支なし」という結論を出し、台北公会より総督府、台北庁と打ち合わせた上、東京の例に倣って、「名刺交換会の如き重立たる事は遠慮することと致し其他は謹慎の意を失わざる程度に於て例年の通り行事差支なしとのこと」を各団体に通牒した<sup>87</sup>。

それでは、この年の正月の実態は一体どのような様子であったのか。街には「国旗の掲揚を遠慮したるもあれば又喪章を附して掲げたるものもあり」、「廻禮を見合せたる者多く例年に比較すれば約十分の二」という様子であった。しかし、その一方「廻禮に代ふるに葉書を以てしたる者多く昨年に比しこれは殆ど倍額」だし、台北駅の乗降者頗る多く、行楽地の圓山、北投行きの日復列車が増発した<sup>88</sup>。このような「表だけの敬意を払う風景」が現れたのは、上述した結論を出

したためだとも言えるだろうが、自主的に諒闇中を意識し盛んな議論を立てたインテリと、一般大衆との間に、「諒闇中」という国家の時間の浸透には強弱の差があることが窺われる（旧正月の状況は後述）。

相似している風景が1915年（大正4年）と1927年（昭和2年）の新年にも出現した。1914年4月に昭憲皇太后がなくなり、1915年の正月を控えて国民が慎む意を表すべし、と新聞が伝えていたが、台北新公園で開いた野球戦が「合図の花火四発轟然」として始まり、「群集約五百流石新春の武装に怠りなく何れも洋服羽織袴の扮装」という有様で、観客の熱気が少しも減らなかったことが報道され、「諒闇中とは申ながら正月が来れば矢張り正月の気になるものだ」というのが実情であった<sup>89</sup>。また、1926年の年末、大正天皇が死去したため、1927の新年は諒闇中であって、喪章が付く国旗を掲げられたが、各地の歳末の市況が大景気であった。同年の旧正月の「大晦日の大稲埕界限流石赤い門聯や爆竹をひさがぬ所に諒闇の慎みをしのぶが人出は永楽町市場を中心にぎっしりと通りもなるぬ三十日は朝から千四百人」という賑わいであった<sup>90</sup>。ここから、日本人にせよ、台湾人にせよ、表だけの「敬意」を表し、裏ではやはり自分のリズムによって生活を過ごしていたことが窺われる<sup>91</sup>。こうして「国家の時間」と人々の時間が重層していたのである。

## 2. 台湾人の時間／日本人の時間／国家の時間

「国家の時間」と重層するほか、実際には新と旧二つの暦が使われているので、二つの正月を迎えるようになっただけではなく、交錯する時間も常に植民地台湾において出現していた。たとえば、1916年2月4日は、旧暦では正月であり、新暦では節分であり、次の日は立春であった。台湾神社や動物園が立地する圓山は賑わい、「本島人で台湾神社に参拝した者も少なく無い、内地人でも又た例の扮装の姿可笑しく隊を組んで参拝した」姿がみられ、「北投や新公園、苗圃などにも女子供達が連れ合っって愉しさうに散歩して居る姿が多く見え、本島人は淡水あたりまで出掛けた者も少なくないが四日は節分の事とて朝日座や栄座、芳乃亭、新高館なども大入りの姿、各料理屋でも扮装姿の仲居や芸者に一段の景気で」ざわめいた<sup>92</sup>。つまり、台湾人と日本人がそれぞれ同じ日に異なる日を祝い、旧正月と節分、立春が交錯する風景を織り成した。また、1918年2月11日は、旧正月であり、紀元節でもあった。紀元節は改暦後の三大節の一つとなり、日本人の集住地域の城内の店は殆ど休業し、「午前には総督府において御真影奉拜式があり文武官の礼装美々しく参集し庁に於ても庁員の参拜式と共に民間の人士も参集して往来織るが如くであった午後の市中は物静かで好天気なのを幸ひ圓山北投方面に一家挙つて出掛けるもの盛んで殊に圓山は豊川閣のお祭り雑貨屋の運動会にて混雑を極めた」。一方、台湾人が集住する「大稲埕、艋舺方面は旧暦の元日なので之又一様に休業し礼装の本島人が回禮に出歩いている」<sup>93</sup>。台湾人と日本人が同じ日にそれぞれ異なる原因で休業し、異なる祝日のために礼装で街を盛んに行き交っていた。もちろん、その中、既に「改暦」したり、紀元節を祝う台湾人も存在する。新と旧のリズムでそれぞれ生活する人々によって、旧正月と紀元節が交錯する風景が呈した。

さらに、上述した明治天皇が死去した翌年の1913年の旧正月は一層興味深い光景が現れた。その年は太陰暦が廃止されて既に四年目であったが、前述したようにこの時期殆どの台湾人は依

然として旧暦で正月を迎える。一方、太陽暦で伝統的な祝祭を過ごす在台日本人にとって、その日はちょうど初午にあたる。諒闇中にそれぞれ新と旧の暦で生活を送る人々は以下のような風景を織り成した<sup>94</sup>。

昨日は初午と陰暦の元日に当たり旧暦を廃止されたる今日に於ても尚本島人は旧慣により前夜來爆竹の音絶えず門聯の朱革まり昨日の如きは大稻埕及び艋舺の土人町は門戸を閉して悉く休業し人力車物売等至って少なく又關渡の媽祖宮へ参詣するもの或は轎に或は大稻埕より船に続々として絶えず大稻埕市場は勿論新起街さへも野菜店を除く外本島人の店は概ね休業したるが流石に諒闇中の事とて廻禮年賀の赤名刺を携えたるはみうけざりし又初午としては圓山の豊川稻荷市場の台北稻荷等を其最たるものとし・・・信者が家々に祭る稻荷等にも相応の往来ありて曇天ながらも午後の台北市街は頗る賑合ひたり

公式には既に陰暦が廃止されたため、旧正月が来る前に、新正月のような年始年末にかかわる議論や通牒などが見られなかったが、回禮の姿が見られなくて自粛しているようである。それは第一期の服喪において一連の儀式を経てから、「諒闇中」のことはある程度台湾人の意識の中に浸透していたからであろう。しかし、人々は「諒闇中」ということで自分の生活リズムをあきらめたということではなく、依然として旧正月を祝った。一方、在台日本人も同じ日に初午を賑わった。圓山護国禅寺内の豊川稻荷で初午祭りが行われ、能狂言、喜劇、花角力、土人人形芝居、活花陳列、露店などの余興も挙行され、「参詣するもの頗る多く」、賑わいを極めた<sup>95</sup>。人々が形式の儀礼だけで「諒闇中」という「国家の時間」を取り入れ、裏ではやはり楽しく旧正月、初午を迎え、自分の生活リズムを過ごした。しかも、諒闇中の植民地において、日本人と台湾人はそれぞれ異なるリズムを過ごしており、「旧正月/初午/諒闇中」＝「台湾人の時間/日本人の時間/国家の時間」という重層的な時間が現れ、奇妙な風景が生み出された。

## 結び

植民地台湾において、皇民化政策が徹底するまでには日本人は新暦の正月、台湾人は旧暦の正月を過ごす、というのは一般的なイメージである。このような大まかな歴史の流れが確かに見られる一方、その巨大な流れの中に潜んで多くの見逃された側面もあった。それらは微々たる表れでありながら、植民地が孕む文化現象であり、その時代の雰囲気や伝えかつ植民地ならの特色を反映するものでもあると言える。本稿では正月を例として、重層的で交錯している植民地の時間を描くと同時に、そのような時間の中に、文化の変容と混淆が生じていることをも見出した。

まず、在台日本人の正月の風景の考察を通して、台湾領有初期に在台日本人は必ずしも新暦で正月を迎えたというわけでもなかった。新聞で新正月の風景の寂しさを指摘する記事や旧暦の除夜に故郷を思いながら爆竹の中で正月を過ごし、更に台湾人の中につり込まれて旧正月を祝う在台日本人の姿から、一部分の日本人が日本内地の故郷にいたときと同じように旧正月を過ごしたことが明らかである。新と旧という二つの生活リズムとすれ違う時間は日本人と台湾人の間にだ

けではなく、内地人同士の間においても存在していた。また、そのような重層的な時間のなか、重層的な空間も見えてくる。各地方から流れてきた日本人は自分の出身地の正月の習慣を持ち込み、植民地台湾という空間に日本内地の様々な空間が積み重なって圧縮された。1909年太陰曆併記が廃止されることを境として、在台日本人が旧正月を過ごす姿が見られなくなり、新曆で正月を迎えることが定着した。そこには、旧曆を捨てやすい商工業、官公吏などの職業に従事する在台日本人の特徴と台湾人の模範になるべしという在台日本人が求められた「使命」が作用していたのであろう。旧正月を過ごさなくなったが、在台日本人は依然として様々な形で旧正月を体感していた。台湾人の町に見物に行ったり、普段行き来する人力車夫、行商の休業を意識したり、商売上の決算を台湾人のリズムに合わせたりする、などのことによって、もう一つの時間リズムに巻き込まれていた。

台湾領有後、旧慣尊重の原則に基づき、台湾人に新曆で正月を迎えることを強要しなかった。だが、1899年改正新関税の実施や商業の往来により、台湾人の正月の風景も変容し始めた。旧正月に「日本式」の要素を取り入れたり、或は新正月を採用しながら元来の習慣を用いたりする現象が起きており、時間と文化の混淆がその中に見られる。1909年太陰曆併記が廃止されることは直ちに台湾人の生活に大きな変化をもたらさなかったが、その後の1916年に結成された「改曆会」と1919年から次々と成立された「同風会」により、新正月の風景が大きく変えられた。多くの台湾人が新正月を迎えるようになりつつ一方、旧正月は衰退したというわけでもなかった。異なる習慣で新と旧二つの正月を迎える台湾人が殆どである。新正月に国旗を掲げ、門松を立てながら、旧正月に春聯を貼り、お寺に詣で、休業するという習慣が定着し、二つの正月の風景は日中戦争勃発までには一般的である。ただし、地域や社会階層により、旧正月をやめる或は新正月を実践する度合いの差もある。すれ違う時間と異なる生活ペースは台湾人同士の間にも生まれたのである。

二つの生活リズムが日本人と台湾人の間に分かれていただけでなく、初期には日本人と日本人の間、中期から台湾人と台湾人の間でも存在した。加えて、日本人にせよ、台湾人にせよ、国家の時間と対面しなければならなかった。1898年の旧正月、そして1913年、1915年と1927年の二つの正月は帝国の時間である「諒闇中」に当たっていた。当時の正月の風景を覗いてみると、新正月でも旧正月でも賑わう光景であり、人々は表だけの「敬意」を払い、裏にはやはり自分のリズムによって生活を過ごし、「国家の時間」と人々の時間が重層している。そのなか、諒闇中の新年をいかに迎えるべきかについて自主的に意識し熱心に議論する新聞記者たちと表だけの敬意を表す一般大衆との間に、国家の時間に対する意識の差も窺われる。新と旧二つの時間リズムに国家の時間が加えられ、重層して交錯する時間は常に植民地台湾に出現することになった。台湾人が旧正月を祝う同日に、日本人が節分、立春、或は紀元節を祝ったりして、交錯する風景を織り成した。さらに、1913年2月6日に、「諒闇中」という国家の時間を取り入れながら、台湾人が旧正月を、日本人が初午を楽しく祝い、興味深い風景を演出し、「旧正月/初午/諒闇中」＝「台湾人の時間/日本人の時間/国家の時間」という重層的な時間がそこに現れた。

以上、正月の風景の考察を通して、植民地における重層的で交錯していた時間を描いてみた。制度としての時間、日本人の時間、台湾人の時間、それぞれズレがあったものの、お互いに絡み

合い、文化の変容と混淆もそこに生まれた。台湾人、日本人、そして地域や階層、集団の違いによりそれぞれ生活リズムを有し、様々な時間が存在していた。しかしながら、戦争に入ってから、そのような交錯する時間は一元的な時間へと統合され、「国家的な時間」しか許されなくなったが、この状況についてまた稿を改めて検討したい。

## 注

- 1 植民地統治下の生活にかかわる研究について、葉肅科は都市発展を考察し、台湾人の日常生活を衣食住、交通、娯楽、正月の習俗、宗教の面を概観している。(葉肅科『日落台北城——日治時代台北都市發展與台人日常生活』台北：自立晚報社文化出版部、1993年)。また、呂紹理は「標準時」という新しい時間制度の導入により、台湾人の生活のタイムスケジュールがいかん政府の推進、学校教育、交通や産業活動の中で変遷していったのかを論じている。(呂紹理『水螺響起——日治時期台灣社會的生活作息』台北：遠流、1998年)。
- 2 異なる文化の接触について、黄昭堂は日本人と台湾人のかかわりを「支配者」と「被支配者」の視角から文化摩擦の側面を検討し若干の問題を提起した。一方、在台日本人にかかわる先行研究はいくつか存在するが、政策面に着目して移民事業を論述する研究が主である。在台日本人にかかわる先行研究については、顔杏如『「島都台北」に生きる——植民地台湾における日本人の外地経験と異文化接触』(東京大学大学院地域文化専攻修士論文、2003年)の序論(1-5頁)で検討した。
- 3 「とき」に関連しては、暦に着目して日本の近代の時間の成り立ちを考察しつつ、地域や植民地の時間を帝国の時間に編成替えする動きを考察した研究は成田龍一「近代日本の『とき』意識」(佐藤次高、福井憲彦『ときの地域史』山川出版社、1999年)の論考がある。
- 4 台北市役所編『台北市案内』1928年、97-101頁。
- 5 1895年勅令167号〈標準時二関スル件〉。ただし、時差がもたらした不便により、西部標準時は1937年10月1日に廃止され、日本所属の植民地はすべて東経135度の「中央標準時」に統合された(呂紹理、前掲書、53-55頁を参照)。
- 6 呂紹理、前掲書。
- 7 『台湾新報』1897.1.5「正月の眺め」。
- 8 台湾総督府民政部文書課『台湾総督府統計書第一号』1899年(統計は1897年のデータである)。
- 9 台湾総督府臨時戸口調査部『臨時台湾戸口調査記述報文』1905年。
- 10 『台湾新報』1897.1.5「正月の眺め」。
- 11 成田龍一、前掲論文、352-358頁。
- 12 平山昇「近代大阪における新年参詣の変容」東京大学大学院地域文化研究専攻修士学位論文、2002年、6頁。
- 13 有泉貞夫「明治国家と祝祭日」『歴史学研究』第341号、1968年、61-70頁。成田龍一、前掲論文、352-358頁)。
- 14 台湾総督府『台湾総督府統計書』第一号～第八号による。(顔杏如「膨張する日本帝国を支える移民——植民地時代における日本人の台湾移住」東京大学大学院地域文化研究専攻入試論文、2002年〈未公刊〉)。
- 15 『台湾日日新報』1901.2.20「陰曆除夜の夕」(くわんさ)。
- 16 『台湾日日新報』1903.1.30「本島人の元旦」。
- 17 『台湾日日新報』1908.1.28「市井雜觀」(空空寂)。
- 18 『台湾日日新報』1903.12.24「歳末年始進物品相場(一)」、1915.1.3「初売と初荷」
- 19 『台湾日日新報』1899.1.5「本年の初荷」、1903.1.1「台北消防組の出初式」、1903.12.24「歳末年始進物品相場(一)」。
- 20 台湾経世新報社編『台湾大年表』(1938年1第4版)復刻版：緑陰書房、1992年、76頁。『台湾日日新報』1909.11.10「四十三年の新曆 愈舊曆は廢止」。
- 21 『台湾日日新報』1909.10.16「陰曆廢止の調査」。

- 22 公務自由業、商業、工業、交通業に従事する者はそれぞれ 12209 人、6582 人、5953 人、3928 人である。（大蔵省管理局編『日本人の海外活動に関する歴史的調査』通巻第一冊、1985 年、211 頁。）
- 23 『台湾日日新報』1909.12.5「農家と新暦」。ただし、この記事は、人々の不安を紹介しつつ、太陽暦を用いても「農家は平気」、「漁師も困らぬ」と説明しているものであった。
- 24 日本内地の場合について、平山は、1909 年の旧暦併記禁止によって新暦行事の比重が上昇し、旧暦行事は急速に衰退しないものの新暦行事よりも盛んではなくなったと指摘している（平山昇、前掲論文、21-24 頁）。
- 25 『台湾日日新報』1909.12.5「農家と新暦」、1916.11.26「改暦会序」。『台湾民報』1929.2.10「提倡實行國曆」。また、在台日本人のこのような意識に関して、胎中千鶴は火葬の状況を考察する論文の中では、在台日本人が「衛生的な」火葬にこだわる動きに、台湾人の視線を意識しながら統治者らしくふるまおう、という意識があったと指摘している（胎中千鶴「植民地台湾の死体と火葬をめぐる状況」『史苑』第 36 巻 2 号、96-97 頁）。
- 26 『台湾日日新報』「消防の出初式」1903.1.7、1904.1.5、1905.1.5、1906.1.7、1907.1.5、1911.12.28。
- 27 台北市役所編『台北市案内』1928 年、97 頁。
- 28 『台湾日日新報』1898.12.20「名刺交換会」。
- 29 波形昭一編著『三好徳三郎と辻利茶舗』日本図書センター、2002 年、216 頁。ちなみに、会場は 1937 年（昭和 12 年）から台北公会堂に変更された。
- 30 「台湾日誌」『台湾時報』1921 年 2 月号、132 頁。『台湾日日新報』「去年の日記」1913.1.1。
- 31 『台湾日日新報』1899.1.5「新年祝賀名刺交換会」。波形昭一、前掲書、216 頁。「新年諸行事——島都における」『台湾時報』1921 年 1 月号、200 頁。
- 32 田中一二編『台北市史』、1931 年、130-131 頁。
- 33 顔杏如、前掲論文、2003、50 頁。
- 34 『台湾日日新報』1903.2.19「街庄長事務所休息」、1902.2.16「區長懇親」。
- 35 呂紹理、前掲書、66-69 頁。
- 36 『台湾日日新報』1899.1.28「第三附屬學校の舊正月休業」、1899.12.29「諸學校の休業」、1900.1.27「舊正月と公學校生徒」、1900.2.1「各學校の休業」、1901.2.20「諸學校の休校」。
- 37 『台湾日日新報』1906.1.24「舊正月と諸學校」。
- 38 『台湾日日新報』1907.2.13「奉正朔」。
- 39 後藤新平はすべての生物が自分の慣習を持ち、外力によって無理やりに変えられないと考え、植民政策についても、植民地の民度、風俗、習慣に従わねばならぬという原則を説いていた。（鶴見祐輔『後藤新平伝・台湾統治編上』太平洋協会出版部、1943 年、40～50 頁。）また、後藤新平の統治政策について、小林道彦の研究がある（小林道彦「後藤新平と植民地経営——日本植民政策の形成と国内政治」『史林』68 巻 5 号、1985 年 9 月）。
- 40 台湾慣習研究会編「新編年中行事（一）」、「旧稿拾録」、「歳端三題」（『台湾慣習記事』第 1 巻第 1 号、1901 年 1 月；第 7 巻第 1 号、1907 年 1 月）。片岡巖『台湾風俗誌』「第四章 台湾人の年中行事」、1921 年。武内貞義『台湾』「第四章 年中行事」1929 年。
- 41 小林里平『台湾歳時記』東京：政教社蔵版、1910 年。
- 42 『台湾日日新報』1903.2.6「土人の迎年（承前）」。
- 43 西村才介『解剖せる台湾』「詩的なる門聯研究」1912 年、31-34 頁。
- 44 『台湾日日新報』1906.1.25「今日は舊のお正月」。1900.2.1「陰暦元日の光景」、1903.2.7「土人の迎年」。
- 45 台湾慣習研究会編「慣習日記」『台湾慣習記事』第 7 巻第 3 号、1907.3、96 頁。同じ内容は『台湾日日新報』1907.2.14「陰暦の元日」にも載せている。台湾慣習研究会編「慣習日記」『台湾慣習記事』第 6 巻第 2 号、1906.2、66 頁。似ている声は他にも見られる。たとえば、「旧暦であったとて甚だしく痛痒をかんじない様なものではあるが、實際雨の降るのに、車夫が無かったり、待つて居る豆腐屋や鶏屋のあなたが来ないことだけでも不便である」という記事もあった（『台湾日日新報』1912.2.19「無絃琴」）。
- 46 台湾慣習研究会編「慣習日記」『台湾慣習記事』第 7 巻第 3 号、1907.3、96 頁。『台湾日日新報』1901.2.20「内外実業」、1902.28「専売局の臨時休業」、1903.2.2「本島石炭の騰貴」。
- 47 建成小第九回同期会『台北市立建成尋常小学校第九回卒業五十周年記念 思い出』1981 年。この

アルバムは建成第九回の卒業生の寄稿を参考しながら、編纂者の岡部茂により作成したものである（台湾協会所蔵）。

- 48 同上書、1981年、21-22頁。
- 49 岡部の通学路から判断した（同上書、1頁）。1930年の時点において、大正町の居住者総数は3205人であるが、そのなか「内地人」は3051人がおり、95.2%も占めていた（台湾総督府官房臨時国勢調査部『昭和5年国勢調査結果表昭和5年州庁編台北州』1930年、2-3頁）。
- 50 1930年の時点において、建成町の「本島人」居住者数は4798人であり、「内地人」は2652人であった（同上書、2-3頁）。
- 51 『台湾日日新報』1900.1.30「陰曆晩歳の景況」。
- 52 『台湾日日新報』1905.12.20「大稻埕たより（四）」、1901.9.20「土人向き内地海産物」。
- 53 『台湾日日新報』1903.2.1「土人の迎年」、1908.2.2「日日草」、1909.1.3「台北の新年」。
- 54 『台湾日日新報』1906.1.25「今日は舊のお正月」。
- 55 『台湾日日新報』1913.1.1「本島人の新年」。新正月に春聯を張り替えるなど、このような新曆における旧慣の応用は太陰曆併記の廃止以前にも例がある（「慣習日記」『台湾慣習記事』第6巻第2号、1906.2.）。
- 56 『台湾日日新報』1909.12.30「略歴概説」。
- 57 『台湾日日新報』1910.1.20「捨舊圖新」、1910.2.10「土人街の景況」。
- 58 『台湾日日新報』1912.2.18「對陰曆改歳感言」。
- 59 原文は「伊古以來新朝定鼎胥改正朔俾知共主我臺版圖易後經二十年於茲本島人循行舊曆迄今未改政府不爲干涉而亦鮮自覺者殊不合於義且舊用之陰曆其推算不如陽曆之正確方今世界事貴大同用陰曆之數實亦不如用陽曆之多彼發明陰曆用四千餘年久之支那且鑑世界大勢改就陽曆不敢矯然自異況我台灣人者乎又正朔一也新舊何所別如以祖宗數十世行之一旦改廢於情未忍以舊曆正朔為紀念義亦有取或曰上業關係皆於舊曆年終結算驟改為難然亦一時難耳若今始預行商妥胥用新曆亦無所謂難也同人熟籌之餘覺時機既晚不容躊躇爰與重要人士籌創斯會議定規約數條世之有心人想亦無不贊成焉是為序」（『台湾日日新報』1916.11.26「改曆会序」）。
- 60 原文は「第六條 會員自大正六年一月一日始實行改曆一切迎年儀式皆於此行之」「第七條 暫以舊曆正朔為紀念祭」（『台湾日日新報』1916.11.26「改曆会序」）。
- 61 原文は「實行方法從新則揭國旗掛七五三繩設門松從舊則換桃符爆竹懸燈掛彩均從其便賀年名刺紅白不拘咎休業三日共伸賀意」（『台湾日日新報』1916.11.29「改曆会序」）。
- 62 『台湾日日新報』1917.1.3「新年の第二日 改曆會と本島人」。
- 63 『台湾民報』1923.12.21「宜廢止門松」、1929.12.8「意義的門松 保甲又將活動」。
- 64 壯丁團は保甲制度を徹底するための一機関である。壯丁には十七歳以上四十歳未満の者を選抜し、一保もしくは数保を連合して編成し、いったん事あるとき直ちに団をなして警備に当る（台北市役所『台北市政二十年史』1940年、816頁）。
- 65 『台湾日日新報』1917.1.24「賑へる舊正月 本島人街の光景」。
- 66 林麗卿「日至時期台灣的社教團體與社會變革——以台北州同風會為例」台中：國立中興大學歷史學研究所碩士論文、1997、17-19頁。王世慶「皇民化運動前的台灣社會生活改善運動——以海山地區為例(1914~1937)」台北：『思與言』第29巻4期、1991.12、5-7頁。
- 67 台北州聯合同風会『同風会概覽』1929年。
- 68 ただし、新曆で正月を迎える実状について、「時節切迫の爲め充分の實行はできなかった。形式上から之を見ると一般に實行した事になって居る。けれども内容に立入つて見ると全然實行したものが十分の三位、旧曆を用ひたものが十分の二位、旧曆も新曆も両方共實行したものが十分の五位であった」としている。（『台湾日日新報』1917.12.22「陋習漸く革る（中） 三角湧同風會の事業」。）
- 69 『台湾日日新報』1919.12.3「同風会と正月の行事 新曆採用其他決議」。
- 70 『台湾日日新報』1920.2.19「艋同風会例会」。原文は漢文。
- 71 林獻堂著、許雪姬編『灌園先生日記』台北：中央研究院台湾史研究所籌備處、中央研究院近代史研究所、2000-2004年（1929年から年賀状發送の記録がある。日記は1927年からであるが、1927年の正月は諒闇中で、1928年は欠けている。したがって、葉書を書き始めたのはもっと前からと推測できる）。

- 
- 72 『台湾日日新報』 1916.1.28 「陰曆廢止厲行」。
- 73 『台湾日日新報』 1916.12.7 「台中序下の美風」。
- 74 『台湾民報』 1926.1.7 「同化了」、1929.12.8 「意義的門松 保甲又將活動」。
- 75 『台湾民報』 1929.1.13 「門松迄も逆宣伝の種 民衆党支部では斯く答へる」。
- 76 『台湾民報』 1926.1.7 「同化了」。
- 77 『台湾民報』 1929.2.10 「提倡實行國曆」。
- 78 明治 30 年閣令第 1 号（皇太后陛下崩御ニ附キ臣民ノ喪期）（1897 年 1 月 12 日）。
- 79 『台湾新報』 1897.2.4 「一昨日の台北」。
- 80 総督府公文類纂冊号 121、文号 3（皇太后崩御ニ関する告示）、1897.1.12。冊号 121、文号 4（皇太后陛下崩御ニ付喪期間歌舞音曲停止）1897.1.12。
- 81 『台湾新報』 1897.2.2 「昨日の艋舺」。
- 82 服喪はさらに三期に分けられた。第一期は死去直後の五十日間、第二期は次の五十日間、そして第三期は残りの期間とされた（中島三千男「明治天皇の大喪と台湾——代替わり儀式と帝国の形成」『歴史と民俗』 21、神奈川大学日本常民文化研究所論集、平凡社、2005 年 3 月）。
- 83 台湾の服喪の状況について、前掲中島三千男（「明治天皇の大喪と台湾——代替わり儀式と帝国の形成」）の研究がある。中島は、大喪の台湾における展開に着目し、「代替わり儀式」が植民地の経営、帝国の形成、台湾住民の「臣民意識」の形成などに果たした役割を考察した。また、中島は「代替わり儀式」が近代天皇性国家の国民統合に果たした役割を問題意識とするシリーズの研究蓄積がある。
- 84 『台湾日日新報』 1912.11.9 「新年の問題 相互の年賀と門松」、1912.11.21 「諒闇の新年 如何に之を迎ふるか」、1912.12.2 「門松の由来 建否渦中の新年問題」、1912.12.4 「諒闇中新年前例」、1912.12.18 「英国では祝った 諒闇と新年降誕祭」など。
- 85 『台湾日日新報』 1912.12.2 「門松の由来 建否渦中の新年問題」、1912.12.4 「諒闇中新年前例」、1912.12.18 「英国では祝った 諒闇と新年降誕祭」。
- 86 『台湾日日新報』 1912.12.3 「諒闇の新年問題 東京の趨勢と諸名士の説」。
- 87 『台湾日日新報』 1912.12.11 「新年問題決す 諒闇中なることを忘れずして祝賀する差支へなし」。1912.12.17 「新年の行事通牒」。
- 88 『台湾日日新報』 1913.1.3 「台北の元日」、1913.1.3 「回禮と葉書」、1913.1.3 「台北駅」。
- 89 『台湾日日新報』 1914.12.22 「諒闇中の迎春」、1915.1.3 「昨日の野球選」、「無弦琴」
- 90 『台湾日日新報』 1927.1.1 「各地の歳末市況」。1927.2.2 「けふ旧正月」。
- 91 日本内地においても類似の状況が見られる。平山の研究によると、諒闇中の正月は門松、注連飾り、年賀などが自粛される一方、盛り場と社寺参詣は大変な賑わいとなっている（平山昇、前掲論文、2002 年、39 頁）。
- 92 『台湾日日新報』 1916.2.6 「立春」。
- 93 『台湾日日新報』 1918.2.12 「各地の紀元節 舊のお正月と一緒に」。
- 94 『台湾日日新報』 1913.2.7 「昨日の市中」。
- 95 『台湾日日新報』 1913.2.7 「圓山の賑合ひ」。